

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：14302

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720239

研究課題名(和文)中国語話者のための日本語教育文法を構築するための基礎研究

研究課題名(英文)Fundamental study to build a pedagogical Japanese grammar for Chinese-speakers

研究代表者

中俣 尚己 (NAKAMATA, Naoki)

京都教育大学・教育学部・講師

研究者番号：00598518

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円、(間接経費) 300,000円

研究成果の概要(和文)：中国語話者が日本語を学ぶ際に必要な文法を効率よく記述するために、中国語話者を対象に習得研究を行った。その際に、従来の日本語学での分類を利用するのではなく、あくまでも中国語との対照を意識した上で日本語の分類を行う。その新しい分類で、難易度に差異が存在することを示すことで、従来の日本語学の記述に従っているだけでは、必ずしも中国語話者のために最適な教材は作れないことを実証した。具体的には、累加を表す「も」、数量表現、漢語サ変動詞の自他というテーマを扱った。

研究成果の概要(英文)：Researches of acquisition of Japanese grammar were conducted among Chinese-speakers in China to describe a Japanese grammar specialized for Chinese-speakers. To achieve this purpose, grammatical words were categorized by not criteria from traditional Japanese studies, but ones that considers the insights from contrastive studies of Japanese and Chinese. Under the new criteria, there turns out to be difference of difficulties. This demonstrates that it is impossible to make the best method or materials for Chinese speaker if they are made from only insights of traditional Japanese studies. For instance, three themes were dealt; "mo"(a marker of addition), quantitative expressions, and transitivity of verbs loaned from Chinese.

研究分野：日本語教育

科研費の分科・細目：第二言語習得

キーワード：習得研究 日本語教育文法 中国語話者 「も」 数量表現 非対格性

1. 研究開始当初の背景

外国人のための日本語教育においてはその学習者の母語に配慮した教育を行うことが重要である。中でも、現在最も学習者数の多い中国話者に対する日本語教育の方法を最適化していくことは喫緊の課題であると言える。

このテーマについては、大阪府立大学の張麟声氏が「中国話者のための日本語教育研究会」を立ち上げ、対照研究・誤用分析・習得研究による検証の3つからなる「三位一体のアプローチ」をプログラムとして掲げている。しかしながら、同研究会においても、実際の研究成果は対照研究と誤用文暦の段階にとどまり、習得研究による実証が行われたテーマは皆無であった。そこで、本研究は、研究会と協力し、これまでになされた対照研究・誤用分析の成果を、中国で学ぶ中国話者を対象に検証実験を行うことで実証し、従来の日本語学の研究成果だけでは説明しきれない難易度の差があることを明らかにすることで、中国話者のための日本語教育にはそれ専用の教育文法が必要になるということを主張することを目的とした。

加えて、習得研究は自己ペース読文課題や眼球運動など、反応時間をコンピュータで計測するなど手法の進歩が目覚しいが、そのような手法による研究の多くは日本国内 (JSL 環境) で学ぶ学習者を対象にしており、実際にはそれよりもはるかに規模の大きい日本国外 (JFL 環境) で学ぶ学習者を対象にしたものは少なかった。そこで本研究ではノートパソコンを使い、中国でも反応時間を測定したり、ディクトグロスと呼ばれる新しい調査手法を試すことを目的とした。

2. 研究の目的

中国話者が日本語を学ぶ際に必要な文法を効率よく記述するために、中国話者を対象に習得研究を行う。その際に、従来の日本語学での分類を利用するのではなく、あくまでも中国語との対照を意識した上で日本語の分類を行う。その新しい分類で、難易度に差異が存在することを示すことで、従来の日本語学の記述に従っているだけでは、必ずしも中国話者のために最適な教材は作れないことを実証する。

上記の最終目標を実現するために、具体的には以下の3つのテーマに取り組んだ

- (1) 累加を表す「も」構文
- (2) 数量表現
- (3) 漢語サ変動詞の自他

以下、番号を付して3つのテーマについて解説する。また、方法、結果においても同様にテーマごとに記述していく。

(1) 並列を表す「も」構文

このテーマに関するデータの収集は研究期間の開始年度よりも前に終了していた。本

研究期間の間に学会発表と論文の投稿を行った。「も」に関する日本語学の従来の記述は主として「累加」「極限」「ぼかし」といった機能の違いに眼目が置かれていた。しかし、学習者の誤用に注目した代表者の先行研究では中国話者は「極限」「ぼかし」といった累加以外の「も」も使用しているのに対して、「～も～も X」という文型は回避されていることがわかった。これを元に、以下の仮説を立て、検証した。

仮説1：中国話者にとって、「も」構文の理解の難易度は「A も P」 > 「A も P、B も P」 > 「A も B も P」の順に難しくなる。

仮説2：中国話者にとって、主格以外に接続する「も」は主格に接続する「も」よりも理解が難しい。

(2) 数量表現

日本語の数量表現は計数機能しかないが、中国語には計数機能と個体化機能があることが知られている。また、語順に注目すると中国語は「一冊本を買った」のような QNV 語順しかないのに対し、日本語では「一冊の本を買った」のような Q の NV 語順と「本を一冊買った」のような NQV 語順が使い分けられている。ここから、以下の様な仮説を立て、検証した。

仮説3：中国話者は、日本語母語話者よりも数量表現や量副詞を多用する。

仮説4：中国話者にとっては母語に存在する QN 語順や、語順に近い Q の N 語順の方が易しいため、これらを多用し、処理速度は早い。NQV 語順は回避し、あるいは処理速度が遅い。

(3) 漢語サ変動詞の自他

このテーマで検証したのは「非対格性の畏」として知られる現象である。自動詞には「私は賛成する」など、主に人が主語である非能格自動詞と、「トンネルが開通する」のように物が主語である非対格自動詞が存在する。中国話者は「*トンネルが開通された」のように非対格自動詞を他動詞の受身形として産出するが、「*私は賛成された」のように非能格自動詞を他動詞の受身形として産出することはないということが知られていた。ただし、韓国語話者が非対格自動詞を一樣に間違えるのに対して、中国話者においては間違いやすいものと間違いにくいものがあり、それは「外的な力」と表現されていたがその詳細は明らかになっておらず、また先行研究は複数回答可能な文法性判断テストであったため、統計的な処理は行われていなかった。本研究では以下の仮説を立て、検証した。

仮説5：中国話者にとって、非対格自動詞のほうが非能格自動詞の方が難しいため、処理に時間がかかり、誤用が増える。

仮説6：中国話者にとって、特に間違いやすい非対格自動詞のグループが存在する。

3. 研究の方法

全ての調査は中国国内(長沙・西安・長春)で実施した。

(1) 累加を表す「も」構文

このテーマについては調査自体は採択より前に終了していたが、論文を研究期間に執筆したのでここに記載する。

仮説1: 中国語話者にとって、「も」構文の理解の難易度は「AもP」>「AもP、BもP」>「AもBもP」の順に難しくなる。

仮説2: 中国語話者にとって、主格以外に接続する「も」は主格に接続する「も」よりも理解が難しい。

上記の仮説を実証するために3つの調査を行った。

1つ目は文法性判断課題で、2011年9月に長沙で実施した。これは質問紙に書かれた文の下線部が正しいかどうかを×で記入するもので刺激は「AもP」、「AもP、BもP」、「AもBもP」それぞれの構文が8問ずつの計24問であり、それぞれ、4問が主格に接続し、4問が非主格に接続する。これをスピーカーから音声を読み上げる方法で時間を統制して行った。

2つ目は翻訳課題で、2011年11月に西安で実施した。2人の中国語での会話を提示し、その翻訳を完成させるもので、刺激は「AもP」、「AもP、BもP」、「AもBもP」それぞれが4問ずつの計12問である。「AもP」構文は中国語に「也」を含み、「AもP、BもP」と「AもBもP」構文は「也」を含まない。

3つ目は作文課題で2011年9月に調査で実施し、対照群として2011年10月に東京で日本人対象に実施した。「来年から寮に入ることを悩んでいる友人に、寮の良いところを紹介する」「バーベキューの準備について、肉と野菜だけあればよしと考えている友人に対して、足りないものを列挙する」という状況で話すべき内容を考えてもらい、列挙表現を誘出するために名詞のリストを付した。

(2) 数量表現

仮説3: 中国語話者は、日本語母語話者よりも数量表現や量副詞を多用する。

仮説4: 中国語話者にとっては母語に存在するQN語順や、語順が近いQのN語順の方が易しいため、これらを多用し、処理速度は早い。NCQV語順は回避し、あるいは処理速度が遅い。

上記の仮説を検証するために4つの課題を行った。

1つ目は反応時間測定課題で2013年3月に西安で実施した。NQV語順とQのNV語順を7つの用法ごとに4文ずつ提示し、正誤を判定するまでの時間を計測した。

2つ目はディクトグロス課題で、実施時期と場所は反応時間測定課題と同じである。

NQV語順の数量表現を含む長文をメモをとらせながら2度聞かせ、その後メモを元に2人で話し合いながら元の文を再生させるという課題である。

3つ目は作文課題で、2012年12月に西安で実施し、対照群として同時期に京都で母語話者を対象に実施した。様々な物や人がある様子を描いた絵を見せ、その絵の内容を描写するというものである。有性物が多い絵と無生物が多い絵の2種類を用意した。

4つ目は翻訳課題で、2013年3月に西安で実施した。NQV語順が可能な場合と不可能な場合の2種の問題、計8問を用意した。

(3) 漢語サ変動詞の自他

仮説5: 中国語話者にとって、非対格自動詞のほうが非能格自動詞の方が難しいため、処理に時間がかかり、誤用が増える。

仮説6: 中国語話者にとって、特に間違えやすい非対格自動詞のグループが存在する。上記の仮説を検証するために2つの課題を行った。いずれも2013年9月に長春の大学で実施した。

1つ目はディクトグロス課題で、他動詞の受身文が多用される文章の中に、非対格自動詞と非能格自動詞を混在させたものを使用した。

2つ目は自己ペース読文課題で、刺激文は「実験の結果は/予測と/一致した」のように3つの部分からなり、3番目の部分は漢語サ変動詞のみで統一し、3番目の部分を読むのにかかった時間を測定した。

刺激は非対格自動詞20、非能格自動詞20、他動詞20であり、それぞれ10文が「する」、残りの10文が「される」で表示される。また、正答率も調査した。これらに加え、文法と語彙の小テストも行った。

4. 研究成果

(1) 累加を表す「も」構文

まず、理解について調査をした文法性判断テストでは、仮説とは異なり、構文タイプによる差は見られなかった。(図1)

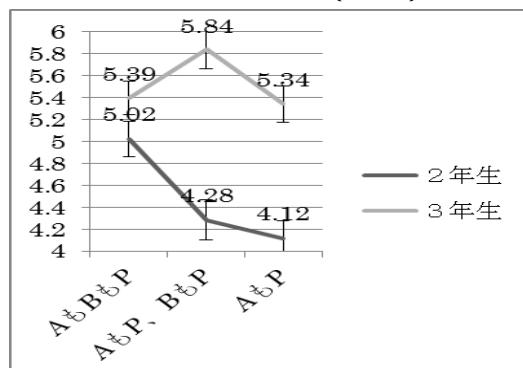


図1 文法性判断テストにおける構文タイプごとの平均点の違い

他方、主格以外に接続する「も」は主格に

接続する「も」よりも理解が難しいことは確認された(図2)。

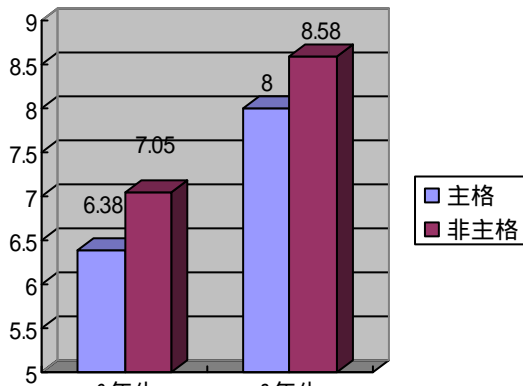


図2 主格と非主格における正答数の差

他方、産出について調べた翻訳課題調査では「AもP」構文はほぼ正しく使用されていたが、「AもP、BもP」構文、「AもBもP」構文は以下のように回避や誤用が目立った。

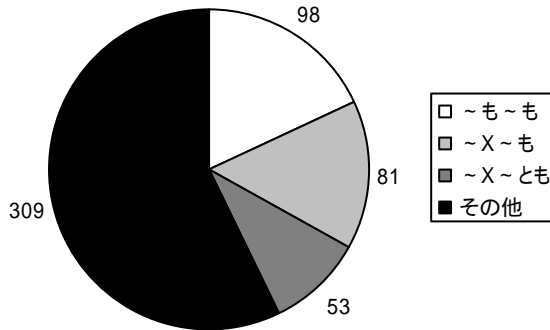


図3 「AもBもP」構文の回答の内訳

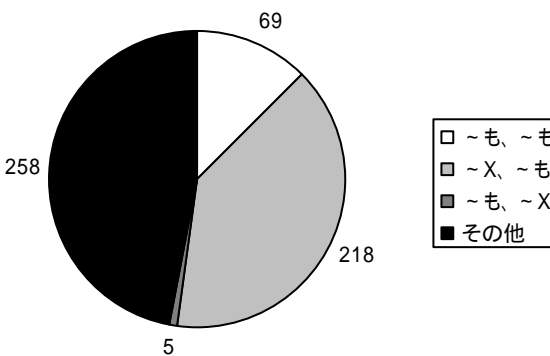


図4 「AもP、BもP」構文の回答の内訳

また、作文課題には「AもBもP」構文は一切見られず、この構文の使用が特に難しいことが示唆される。また日本語話者と比べると「AとかBとか」といった表現も回避され、「AとB」、「A、B」といった表現が多用されていることもわかった。

まとめると、「AもBもP」、「AもP、BもP」のように「も」を複数使うと産出における難易度が上がるということが実証され、これは従来の日本語学では重視されていなかったところに難しさの鍵があるということであ

る。この研究の内容は日本語教育学会 2012年度春季大会で発表を行い、雑誌『日本語教育』に掲載された。論文内においても日本語学的視点にとらわれない中国語話者のための教育文法の必要性を強く主張し、このことで、本研究の目的を達成できたと考える。

(2) 数量表現

まず、ディクトグロス調査で語順を調査したが、手元のメモに語順がそのまま残ってしまい、捗々しい結果は得られなかった。ディクトグロス調査では課題を吟味する必要があるということを経験とした。

反応時間測定課題においては、中国語話者では最も標準的な機能の文においてのみ、日本語で標準的な NQV 語順の処理速度が速く、QのNV語順が遅いという結果が得られた。他方、母語話者では複数の数量表現を使用する対比型の文でのみ標準的な NQV 語順の処理速度が速く、QのNV語順が遅いという結果が得られた。

また、作文課題においては中国語話者は日本語話者と比べて、数量詞を多用するということがなかったが、「たくさん」などの副詞を多用していることがわかった。また、語順については2年生は中国語と同じQNVでご順を多用し、3年生になると標準的なNQV語順が増えることが確認された。

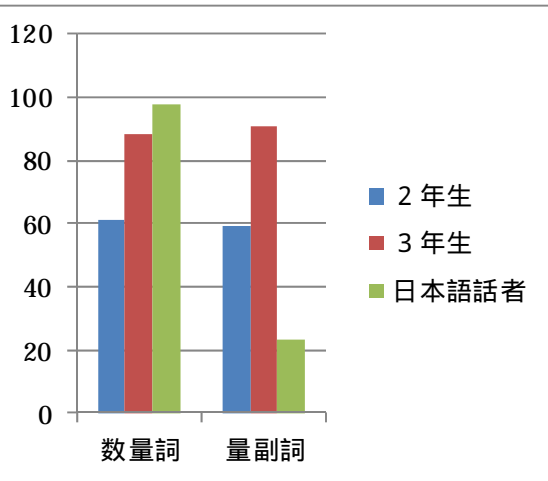


図5 作文課題に出現した数量詞と量副詞

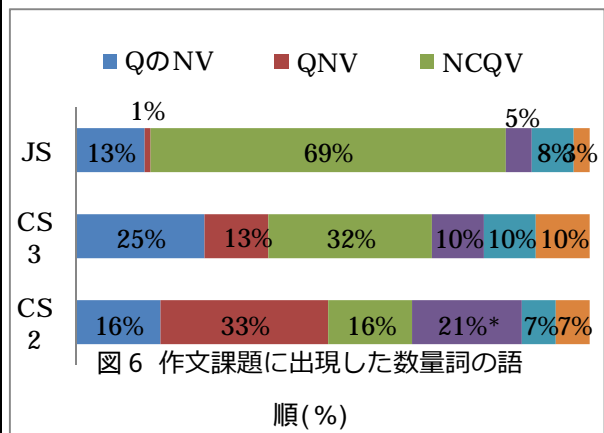
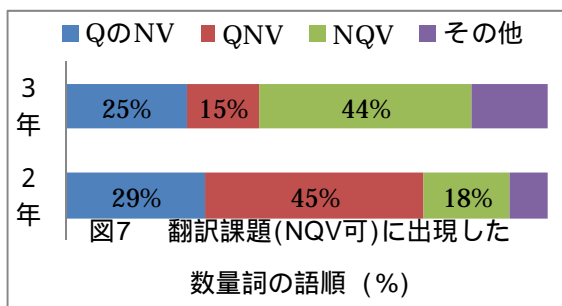


図6 作文課題に出現した数量詞の語順(%)

翻訳課題でも語順に注目した結果、同様の

結論が得られた。



まとめると、産出ではまず QNV 語順が選好される傾向にあるということである。一方で、理解面では反応時間測定課題で QNV 語順を試していないので確固たることは言えないが、産出では選ばれない NQV 語順の方が処理が早いことから理解と産出では処理の仕方が異なることが示唆される。(これは「も」の課題においても同様であった。)

このテーマの成果は中国語話者のための日本語教育研究会第 26 回研究会ならびに日本第二言語習得学会第 14 回年次大会にて発表する。また、今後学会誌に投稿する予定である。

(3) 漢語サ変動詞の自他

ディクトグロスの結果、非能格自動詞を「される」とした回答はゼロであった。非対格自動詞では「開通」「発展」の間違が多く、「増大」「拡大」の間違いは少ないなど、差異が見られた。この調査結果は改めてディクトグロス課題が産出されにくい文法項目の難易度の測定に適していることを示すものである。

表1 ディクトグロス課題の結果

カテゴリ	動詞	する		その他
		る	れる	
非対格	開通	32	15	5
	発展	32	14	6
	感動	33	7	12
	増大	19	3	30
	拡大	10	2	40
非能格	乗車	29	0	23
	協力	35	0	17
	賛成	33	0	19

また、反応時間課題では正文刺激、非文刺激いずれにおいても非能格自動詞が他のタイプと比べて有意に処理時間が長かった。また、正答率は非対格自動詞が低く、難易度は非対格 > 非能格であることが確認された。また、ディクトグロス・反応時間課題ともに正答率は文法テストの結果と相関が見られ、語彙テストの結果とは相関がなかった。

更に、設問ごとの正答率を精査したところ、「映画を見て感動した」「地震で倒壊した」のように理由が明示されているものの他に、「経済的な格差がどんどん拡大している。」「パーティーは順調に進行した。」のように漸進的な内容のものの正答率が低いことが

わかった。ただし、これらは統制条件ではないため、今後、漸進性や理由の有無を統制条件とした追加調査が必要である。

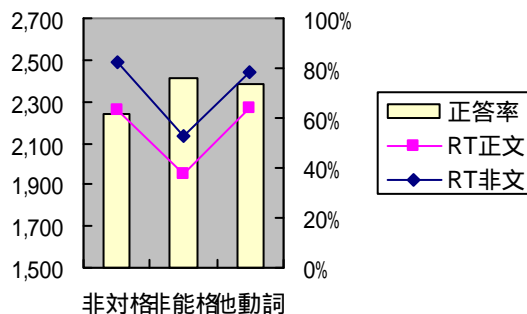


図8 反応時間測定課題の結果 (左軸：反応時間 (RT) ms、右軸：正答率%)

このテーマの成果は中国語話者のための日本語教育研究会第 28 回研究会にて発表した。一体何が非能格自動詞と非対格自動詞の反応時間の差を生み出しているのか、また、漸進性は本当に非対格動詞を他動詞と認識する原因となっているのか、など明らかにすべき課題は多い。今後、母語話者も含めた調査を行い、学会誌への投稿を目指す。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

中俣尚己、「中国語話者による「も」構文の習得 「A も B も P」「A も P、B も P」構文に注目して」、『日本語教育』、156 号、査読有り、pp.16-30、2013 年

〔学会発表〕(計 5 件)

中俣尚己、「中国語話者による日本語数量表現の習得 語順の発達段階と量副詞類の多用」、日本第二言語習得学会第 14 回年次大会 (於 関西学院大学)、2014 年 6 月 1 日

中俣尚己、「中国語話者による漢語サ変動詞の自他の習得 ディクトグロス課題と反応時間課題を用いて」、中国語話者のための日本語教育研究会第 28 回研究会 (於 交流協会台北会館)、2014 年 3 月 2 2 日

中俣尚己、「日本語話者と中国語話者における日本語数量詞の語順選好の比較」、中国語話者のための日本語教育研究会第 26 回研究会 (於 京都教育大学)、2013 年 7 月 13 日

大谷つかさ、中俣尚己、「Skype を活用した会話活動 「教えこむ」立場からの脱却」、日本語教育国際研究大会 名古屋 2012 (於 名古屋大学)、2012 年 8 月 18 日

中俣尚己、「作文課題による並列表現の習得研究「も」と「とか」を中心に」、日本語教育学会 2012 年度春季大会（於 拓殖大学）、2012 年 5 月 27 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中俣尚己 (NAKAMATA Naoki)

京都教育大学 教育学部 講師

研究者番号：00598518